

きな差異があるといわなければならぬ。

さらに、漁村は一口に漁村といっても、それがおかれ自然条件、漁業種類、漁撈型態、流通機構のあり方、および上からの変革の村落段階でのうけとめ方によって、村落構造の展開にはかなりつよい個性的分化がみられ、その一般化ないしは類型化を困難ならしめている。したがって、漁村「構造の変化に対する推進力」(推進力という言葉に論議はあろうがここでは漁村構造——この言葉も多義的であるが——の変化を促進する要因と理解する)といっても、漁村構造の変化をすべて摘出しそれを一般化して整理することは到底不可能である。本報告では三重県南勢町の一漁村「田曾」——カツオ・マグロ遠洋漁村——を事例としてとりあげ、

- ① カツオ・マグロ船主および加工業者の系譜的考察
- ② カツオ・マグロ漁業における労働市場の性格
- ③ ①②の関連から、商人——船主——船頭——漁夫の関係などの諸点を明らかにすることによって、漁業における資本主義の発達が漁業村落の構造をどのように規定し、変容せしめてきたかについて考察したい。

ところで、カツオ・マグロ漁業は、古くから太平洋岸の各地に分布し、徳川期以来明治期にかけて最大規模の漁業であった。明治三八年の遠洋漁業奨励法にみられるように、明治政府の漁業に関する

牧野由明(愛知大学)

「資本制漁業の展開と村落構造の変容」

水産資源は、その移動性・群集性・自律更新的性格を基本的特性とし、それに関連する生産対象としての漁場は、その本性において私的占有をいちじるしく困難にする。また漁業における技術の発達には、利用漁場を拡大し必然的に激烈な競争を促進させ、究極的にはしばしば濫獲による資源の枯渇をまねく。こうした漁業生産の特殊性は農業におけるそれとは本質的に異なっており、明治以降の漁場の用益の問題は、今日にいたるまで農地や山林の場合とはいちじるしく異なつた措置がとられてきた。このように基礎過程としての生産機構と、上からの体制的支配の態様がいずれも遠り漁村と農村とは、そこに展開される村落の構造も、またその変容のしかたも大

る保護奨励がつねにこの種目を対象にして行なわれたことや、漁船動力化がもつとも早く進められた点などを考えれば、カツオ・マグロ漁業のなかに、わが国の漁業における資本制経営の発展をみるこ  
とができる筈である。ところが実際には、漁業における資本制経営の発達、捕鯨あるいはトロール漁業などの輸入漁業種目のなかに典型的にみられることは、旧慣尊重をたてまえとするわが国の漁業体制の大綱に由来するものであり、在来漁業としてのカツオ・マグロ漁業もまた日本資本主義の後進性の一般的性格の規定をまぬがれえなかつたことを物語っている。

現在、カツオ・マグロ漁業は、二〇〇トン級の船を例にとれば、それを建造するに約一億三千万円、年間総水揚高八千万円―一億円、乗船人員四五名程度というかなりの経営規模を必要としている。しかし、漁撈形態として支配的なものは釣漁法という単純協業であり、それは極言すれば、徳川期以来の沿岸漁業から遠洋漁業への漸次的発達にすぎず、漁撈それ自体のうちに質的転化を意識させるものは存在していない。また雇用労働力も役付漁夫（漁撈長・機関長・無線局長・船長・甲板長など）をはじめとして血縁関係者・地縁関係者が大半を占めていることにカツオ・マグロ漁業における漁撈組織の特徴をみることが出来る。このような漁撈形態、漁民層構成の特徴と、さらに漁港基地の広範な分布、市場問題、および歩合制賃金の形態などの諸問題を考え合わせるとき、カツオ・マグロ漁業は、その経営規模が外観的にいかに大きくとも、経営上の組織および精神のなかに依然として前近代的な側面があるといわざるを得ない。

#### IV

田曾は五か所湾の入口に位置し、現在戸数四四三、人口二〇三九、専業農家〇という純漁村である。以下むらの概要を粗述する。

④ むらにおけるカツオ漁業の歴史は古く、漁船の動力化以前（明治末年）すでに一二隻のカツオ船を数えることができるが、動力化とともに大正期から昭和期にかけてその数は減少し、戦前にはわずかに一隻のみが操業したに過ぎない。ところが戦後、ことに昭和三〇年前後には百五十トン級のカツオ船が二五隻（うち管理船一〇隻）に急増し、現在では二〇〇トン級またはそれ以上のカツオ船四三隻（マグロ専門船もふくむ、うち管理船八隻）を擁し、むらの生活のすべてはカツオ・マグロ漁業に支えられている。

⑤ 大正期以降におけるカツオ漁船の激減は、地元商人資本の未成熟な田曾においては、中途半端な遠洋漁業よりはむしろ沿岸漁業への後退が相対的に有利である条件がさらに存在していたためである。カツオ漁業はつねに地先における沿岸漁業（ことに餌イワシの確保）と不可分な関係にあり、前述のように漁撈それ自体のなかに一線を画すべきものは存在していなかった。

⑥ 昭和三〇年前後におけるカツオ漁船の急増は、英虞湾および五か所において真珠養殖業者が爆発的に増加した時期に相当する。英虞湾および五か所湾に面するむらで真珠養殖が全然おこなわれなかつたむらは、田曾のみであり、好適な真珠養殖漁場をもたなかつた田曾は、この時期に遠洋漁業としてのカツオ・マグロ漁業を確立したといえる。過去にカツオ船経営の歴史があつたとはいえず、また

それがすべてではなかつたにしろ、漁業における自然的条件の重要性を見のがすことはできない。

⑤ 商人—船主—船頭—漁夫の関係をみると、市場から遠くはなれた田舎においては地元商人の成長は劣勢であり、船主は地元外商人または地元外組合と結びつき、操業漁場との関係もあつて地元漁協への水揚げは皆無といつてよい。ここに地元商人—加工業者と漁業組合の悲劇があるが、船主もまた地元にとどまる限り大きな成長はのぞめない。したがつて、船主はある程度成長すると自ら市場を求めて他所へ転出する。一方、加工業者は一、二の例外を除いて五—一〇トン程度の他所船が組合へ水揚げしたカツオを加工、販売してわずかに息づいている現状にある。地元商人の劣勢は、船主をしてカツオ操業当初においては、多くの場合、船頭であることを余儀なくせしめる。そのため船主は経営者としての側面と船頭としての側面をもたなければならぬ。昭和三〇年以来、現在なおチャーター船といわれる管理船経営をおこなうものが多いのはこのためである。

船頭は船主が兼ねる場合もあるが、カツオ漁業が軌道にのつた最近では、両者は分担されており、そのほとんどはかつて船主とともに船に乗った経験豊かな近親者がこれにあつてゐる。優秀な漁夫の確保は、船主および船頭にとって急務であり、雇用の安定には当然のことながら血縁・地縁関係がすぐれている。また、婚姻も労働力調達のために主要な役割をはたしており、顕著な村内婚とともに地村の漁夫が結婚して田舎に住みつく例が少なくなつた。

⑥ 漁業組合は、明治期における伝統をそのままに、一方において地先漁場の管理主体として漁業者の集団であるとともに、他方においては部落の自治行政の中核として機能している。ことに最近におけるいちじるしい遠洋漁業への傾斜は、地先沿岸漁業を極端に衰微せしめ、組合は、漁業の資本主義的發展とともに業種別組合の性格を強めるのではなく、むしろ部落の自治行政の機能を強化する逆行の現象を示し、地元漁場の共有觀念の潜在化を基盤として部落における共同体的性格を温存する中核となつてゐる。一定の経済的段階に成長してむらを出た船主は、本拠地を例えれば清水市などに移転させるが、それは一方的な離村を意味するのではなく、船籍は依然として地元の漁業組合にのこし、いままなお漁獲物に対する一定の歩合を組合におさめる。むらはまた労働力供給の場として船主に對して重要な機能をはたしている。